



子どもの本から

白銀は招くよ

皆川美恵子

エルサ・ベスコフの描く愛くるしい子ども、その子どもが、白い雪の中を赤い毛糸帽をかぶり、スキーを滑っている表紙絵を見るなり、ドキドキして魔法にかけられたように絵本に吸い寄せられてしまう。静かに穏やかに晴れわたった完璧なスキー日和が、まるでその場の透きとおった空気までを伝える

かのように描き出されている。青空が広がり、幻想的な白い世界が限りなく続き、妖精のような子どもが頬を赤らめスキーに興じている。静謐そのものだが、シユプールの描かれていく足もとからは、まるで音が聞こえてきそうで、スキー好きには抱きしめたくなるような珠玉の絵本なのである。

北欧スウェーデンの冬と春の季節は、絵本の中で、冬王の支配する男性的な宇宙と、春の女王が光臨する女性的な宇宙とで明解に組み立てられている。雪の降る冬は、スキー、そり、そしてスケートで遊ぶ元気な男の子ウツレにとっては、早く到来し、いつまでも続いてほしい好ましい季節なのである。冬生れのウツレは、六歳の誕生日に本物の新しいスキーを父親から贈られる。ウツレは雪が降るのを心待ちにするが、なかなか降らず、やっとクリスマスの日、三週間前から雪が舞い始める。そして二日二晩降り続いた次の日、冬晴れの青空となる。ウツレは、新しいスキーをはいて白い森の中へ一人で滑ってゆき、魔法の森のような美しさに、思わず「ありがとう、親切な冬王さま。とうとうやってきてくださいましたね」と叫び、森に挨拶をする。すると八白霜しいさん▽が登場して、△冬王▽の住む城まで案内されるというストーリーが展開されてゆく。

冬王の城には、妖精のように小さなラップランドのおじいさん、おばあさん、そして子どもたちが、スキーやスキー靴、スケートやそりを作ったり、靴下や手袋を編んでいる。スウェーデン中の子どもに

◀ 『ウツレと冬の森』エルサ・ベスコフ作・絵  
小野寺百合子訳 らくだ出版 一九八一年



贈るため、クリスマスに向かつて仕事の真最中なのである。森から帰ったウツレは、クリスマスの朝、ウツレへはスケート、弟へはそりが届けられ、冬王からの贈物が、白霜じいさんによってなされたことを確信する。

サンタクロース像も見えかくれする冬王だが、この冬王の住む城、冬の森への《行きて帰りし》物語に、さらには春の季節を告げる八雪どけばあさん▽そして八春の女王▽が配置されているのは、多目に注目される。雪どけばあさんは、春の女王のために箒で雪を掃いて雪を溶かしていくおばあさんで、白霜じいさんからは蛇蝎のように忌み嫌われている。季節をわきまえず、冬の最中に雪を取り除き、雨と泥で白銀の世界を台無しにするという理由からである。ウツレは、白霜じいさんになつており、雪どけばあさんに腹を立てていた。しかし、春の女王が蝶の羽ばたく車に乗って到来すると、雪を溶かす仕事を終え、ま新しいエプロンをかけたおばあさん

が、にこやかに女王を迎える姿を見ることによつて、おばあさんにも親しみを感じてゆく。

このように物語には、冬生れの、スキーが大好きな少年が、雪の消える春と和解していくストーリーも組み込まれている。北欧に生活する子ども、子どもさながらの愛らしい自然への理解が、巧みに表現されているのである。

ところで、上州赤城で生れ育つた猪谷六合雄は、日本にスキーを初めて紹介したレルヒ中佐が、一九一一年に高田でスキーをしているが、それから間もなく、一九一四年にスキーを開始している。それまでは雪の中へ出るのが億劫でならなかったが、スキーで滑り出すと、雪の世界は急に樂園になつたと書いている。そして猪谷は、「雪国の幼少年が喜んで雪の上へ勢揃いするような日が来たら、そのことだけでも大きな収穫だと思ふ」と、スキーの効用について書き留めている。ウツレは、まさしく、猪谷六合雄が夢に見た子どもなのである。

絵本の作者エルサ・ベスコフ（一八七四―一九五三）は、ノルウェー人を父に、フィンランド人を母に、スウェーデンに生まれている。家系から見ても北欧そのもののベスコフには、北欧の自然から芽生え、育まれた三十三冊の絵本がある。本書は、一九〇七年の作品であり、邦訳は一九八一年、小野寺百合子氏によってなされている。

エレン・ケイ、トーベ・ヤンソン、アストリッド・リンドグレーンの著作など、スウェーデン語から日本語への翻訳で名高い小野寺百合子氏には、第二次大戦の折、バルト三国やスウェーデンで武官夫人として生活した記録『バルト海のほとりにて』（共同通信社、一九八五年）の著書がある。そこには、スウェーデンで兵器用資材として、ピアノ線、ボール及びボールベアリングを購入し、日本へ輸送する為、まずドイツまで送り、ドイツからは潜水艦で日本へ送ったとある。さらには、東京の子どもへ向けとも届け物が許された為、荷物の中にエルサ・ベス



▲ウツレは、あたらしいスキーをはくと、おかあさんとおとうにいてきますと手をふって、広い野原をとおり、森の中にすべって行きました。

コフの絵本を入れて送ったとも書かれてある。

「子供たちはもちろん絵本の年齢ではなかったが、彼女〔エルサ・ベスコフ〕の絵本の底を流れる温かい母心が何とも好きで、せめて私の気持を子供たちに届けたいと思ったのである。戦後、帰国してからそのうちの二冊が私の手に戻った。何冊着かなかつたのだろうと思うと暗然とした」。戦闘が繰り広げられた海を越え、潜水艦が運んで届けた二冊のベスコフの絵本とは、さて何だったのであろうか。

ウツレの母親は、ウツレがスキーで森へ行ってもいいでしょうと許可を求めると、まず朝ごはんを食べさせ、それから厚いコートを着せ、スキー手袋をはめさせ、両方のポケットにサンドイッチをつめこみ、夕方までに帰る約束をさせる。そうして、飲み飲んで出かけるウツレを見送っている。小野寺百合子氏が語る「温かい母心」を、私はウツレの母親に殊更強く感じてならない。

ウツレが、はじめは疎ましく思っていた雪どけば

あさんの微笑を見て、思わず好きになるところも、

ウツレの人間愛が母性愛に包まれているからこそ培われてくる、温かさの通い方だと得心がゆくのである。ウツレは、世の母親なら、こう育ってほしいという理想の子ども像でもある。いや、ベスコフの描く絵本の子どもたちは、どの子もみな、現実的な子どもというより、純粋な子ども造型に近い。透明で、子どもそのものの理想的な結晶の輝きに満ちているのだ。ベスコフは、その輝きを追求したのであろうし、疑うことなく愛くるしい子どもを描き続けたことが、私には偉大であると思われるのだ。

(舞々同人)